

## インタビュー 心で感じる紙芝居



紙芝居を演じるマリーさん

話し手  
マリー・シャルロット・テルマス氏

11月におこなわれた紙芝居文化の会の主催による「第十二回紙芝居講座」に、フランスから特別ゲストとして参加されたマリー・シャルロット・テルマスさんにインタビューしました。

— マリーさんにとっての、紙芝居の魅力をおきかせください。

マリー わたしは、紙芝居には単なる「魅力」というよりも、人を夢中にさせる「力」があると思います。紙芝居を演じていると、クスクス笑いがおこったり、ため息がおこったり……、子どもたちからいろいろな反応が返ってきますよね。そんなふうに演じ手も観客もみんないつしよになって、“今、ここで共に生きていること”を感じとることができる。紙芝居には、そんな「力」があると思います。

— 紙芝居にはなぜそのような「力」があるのでしょうか？

マリー 紙芝居は、絵本や物語とはかなりちがう独自の文化です。フランスの図書館では、子どもたちに物語を語りかせる伝統があります。でも、子どもに物語を語る時、その子が小さい子であればあるほど、物語のなかに出てくるドラゴンや鬼や巨人などのイメージを、かならずしも共通に思いえがけるわけではありません。子どものイメージは、あくまでその子ども固有のイメージなのです。

しかし、紙芝居を見る時は、子どもたちはみな同じ絵を一緒に見えていますよね。そして紙芝居の絵は、簡潔で力強く、子どもたちが一緒に見るのにふさわしいものなのです。わたしの大好きなまついのりこさんの紙芝居でもそうですが、脚本と一体になった絵が存在するからこそ、そこに子どもたちがいつしよに参加できるのだと思います。だから、みんなが参加者になって、“今ここで共に生きていること”を感じとることができるのでしょう。

— だから「共感」の感性をはぐくむことができるのですね。

マリー そうですね。そして紙芝居は、頭で考えるのではなく、心で感じることで、より深く味わうことができるのだと思います。ですから、紙芝居に関する理論の研究ももちろん大切ですが、なにより大切なことは、紙芝居を体験し、紙芝居の世界に飛びこむことではないでしょうか。

— ありがとうございました。

(2007年11月11日 吉祥寺・紙芝居文化の会「第十二回紙芝居講座」会場にて)

マリー・シャルロット・テルマス氏

「ルイ・アラゴン」マルチメティア図書館館長。2002年と2006年の2回にわたり、フランスでの紙芝居講座を実現させた紙芝居運動家。上記図書館のあるパニユー市で、紙芝居を保育や教育の現場に取り入れた街づくりを熱心にすすめている。